

カブール大学視察報告書

東京農工大学工学部教授 望月貞成

東京農工大学農学部教授 田谷一善

東京農工大学農学部教授 島田 清

東京農工大学農学部教授 平沢 正

2002年5月

カブール大学視察報告書

まえがき

2002年5月17日から22日まで、東京農工大学の4名の教官（望月貞成，田谷一善，平澤 正および島田 清）が、文部科学省岸田副大臣および井上審議官ら一行とアフガニスタンのカブールを訪れ、カブール大学を視察し、東京農工大学宮田清蔵学長の代理として、大学間協定の締結を行った。その結果、東京農工大学は、カブール大学と大学間協定を結んだ日本最初の大学となった。

今回の計画は副大臣のアフガニスタン視察に合わせて急遽浮上してきたもので準備期間も殆どなく、また、アフガニスタンの通信手段が復興していないため、カブール大学側と事前に十分な打合せがないまま出かけた。それゆえ、当初は目的を十分に達成できるか危ぶまれたが、関係各位のご協力を得て、結果的には本来の目的を十二分に果たすことができたと考えている。

本報告では、以下の各項目について、順に詳細を述べる。

1. カブール大学視察団派遣に至った経緯，
2. 視察日程と視察団，
3. カブール大学と東京農工大学との大学間協定，
4. 視察結果，
5. カブール大学からの要望，
6. 今後の支援策，
7. 高等教育大臣との会見，
8. 農業大臣との会見
9. 視察結果の考察，
10. おわりに

1. カブール大学視察団派遣に至った経緯

アフガニスタンの復興のために、日本は2004年までに5億ドルの支援を行うことを公表し、すでに現地において支援活動が開始されている。2002年3月には、駒野欽一特命全権大使が着任し、現在4名の館員と共にカブール市内の仮公舎で日本大使館としての業務を行っている。日本からの復興支援事業の中でも教育に関する支援は予算額において2番目の重要課題として取り上げられ、これまでに初等中等教育や女子教育への支援が検討されてきた。初等中等教育では、日本が資金を提供（財源の60%は日本が拠出）して実施したバック・ツー・スクール・キャンペーンが進んでおり、現地で17万人の子供たちの教育が再開されている。一方、高等教育（大学教育）に関しては、内海成治教授（大阪大学）と大森不二雄文部科学省高等教育局視学官が本年4月にカブール大学を訪問して調査し、報告書を提出した。その報告書によると、カブール大学の復興に関して、米国ではパデュー

大学が中心となって支援を計画している。それゆえ、文部科学省としては、パデュー大学の姉妹校である東京農工大学（日本）とパデュー大学（米国）、カブール大学（アフガニスタン）の三角間協力の可能性を考えた。一方、本学の宮田学長は、アフガニスタンの復興について東京農工大学にできることがあれば協力したい旨を表明していた。そのような背景から、文部科学省は、高等教育支援のための調査団として東京農工大学から4名の教授を調査団員として派遣することを決定した。調査の時期としては、できるだけ早期にカブール大学の現状を把握する必要があることから、今回の文部科学副大臣のアフガニスタン訪問に合わせて同行することとなった。

視察団の出発に際して、5月10日に内海成治教授（大阪大学）、岡谷重雄氏（文部科学省国際交流政策室長）、村野弘明氏（文部科学省国際交流政策室長補佐）および大森不二雄氏（文部科学省高等教育局視学官）が来学し、本学からの派遣教官との事前打ち合わせが行われた。この事前打ち合わせの際に岡谷室長から、今回のカブール大学の視察について次のような目的で調査してほしい旨の依頼があった。

- (1) カブール大学がどのような方向性で教育復興を計画しているのか、また、どのような人材が居るのかを調査する。
- (2) 日本からカブール大学への教育復興支援を行うに際し、どのような協力体制が適しているかについて調査する。
- (3) 今後、カブール大学への教育支援事業を進めるにあたり、人脈を確保する。

また、今後の教育支援に際して、カブール大学と東京農工大学の間で姉妹校提携を進めるよう提案があった。

2. 視察の日程と視察団

視察の日程は次のとおりであった。なお、*印を付けた項目は、岸田副大臣一行に同席したことを意味する。

5月17日（金）

17:50 成田発（NH915）

23:05 バンコク着

5月18日（土）

0:45 バンコク発（PK893）

8:00 イスラマバード着

在パキスタン沼田大使との懇談*

タキシラ遺跡の視察*

19：30 沼田大使主催の夕食会*

5月19日(日)

9：40 イスラマバード発(国連機)

9：30 カブール着 宿舎チェックイン

11：30 アミン教育大臣との会談*

12：15 駒野大使による昼食会*

14：00 教員養成校の視察* 教員養成校跡地の視察*

15：00 カブール大学視察*

副学長、農学部長、工学部長との懇談 農学部施設の視察

小学校の視察

アンワリ農業大臣との会談

18：30 駒野大使による夕食会*

5月20日(月)

9：00 カブール大学副学長室にて姉妹校提携の調印

高等教育副大臣、副学長、農学部長、工学部長

10：30 農学部長室にて農学部各学科スタッフとの懇談

実験室・講義室・農場・授業の視察

中央図書館の視察

15：00 獣医学部スタッフとの懇談

19：30 アミン教育大臣主催の夕食会*

5月21日(火)

8：30 地雷除去現場視察*

10：00 カブール発(国連機)

12：30 イスラマバード着

イスラマバード周辺のかんがい施設、養鶏場の視察

19：00 イスラマバード発(PK309)

20：55 カラチ着

5月22日(水)

3：55 カラチ発(TG508)

9：45 バンコク着

11：20 バンコク発(TG640)

19：30 成田着

視察団は、先方の希望分野により次の構成となった。

東京農工大学工学部教授 望月貞成（機械工学）

東京農工大学農学部教授 田谷一善（獣医学）

東京農工大学農学部教授 島田 清（農業土木学）

東京農工大学農学部教授 平沢 正（作物学）

3. カブール大学と東京農工大学との大学間協定

5月20日朝9時に前日の約束どおり、農工大の4名は、協定書への署名式を行うべくカブール大学のChancellor's Officeを訪ねた。

何故か、署名式に先立って、カブール大学のPublication DepartmentのMr. Ziaからの話を聴く場が設定されていた。印刷機・コピー機などが一切無いため大学の基本的な機能が麻痺状態にある旨の窮状を訴えられた。Mr. Ziaは英語を話せないようで、副学長が自らが通訳した。印刷・コピーの機械が全くないというのは、大変困ったことであろう事は想像に難くない。わざわざこれを署名式の前に設定したのは、よほど困っていて援助をしてもらいたいとの強い要望の表れであることが分かる。カブール大学からは教官個人の名刺はおろか、大学の案内その他の印刷物を一切貰わなかったこともこれが理由であろうと思われた。

次いで、副学長アリ・ユスファー教授(Prof. Ali Yussufpur)の比較的改まった挨拶があった。予め紙に手書きで書いた文書を用意しておりそれを読み上げた。丁寧である。農工大側は、望月より簡単な挨拶の後に協定書の概略趣旨説明を行う。副学長は一言一言に大きく肯いていた。

署名のセレモニーに移る。TVが取材に来ていた。後から聞いたところによると、その晩の7時および8時のニュースで放映されたとのことであったが、我々は教育大臣主催の晩餐会に参加したため、見ることはできなかった。

協定書と合意書それぞれにつき英文と和文2部ずつ、計8部について、署名をした。署名人は、農工大側：望月、カブール大側：Ali Yussufpur。いずれもそれぞれの学長の代理人である。参加者は以下のとおりであった。

カブール大学側（7名）

- 1 . カブール大学副学長アリ・ユスファー(Prof. Ali Yussufpur)
- 2 . 高等教育省の大臣代理サイド・ナイーム・アーリミ(Mr. Sayeed Nayeem Aalimi ,
Acting Minister for Higher Education)
- 3 . 農学部長 M.Y.モシニ (Prof.M.Y.Mohsini , 栽培学)
- 4 . 工学部長アブドル・ワヘド・ジア(Prof. Abdul Wahed Zia , 電気工学)
- 5 . M.A.Mukhtar G. Director of Kabul university (事務局長)
- 6 . A. Zia Rafat, Publication Dept. (出版部責任者)
- 7 . Assad Shayeeq, Dept. of Foreign Affairs (国際問題担当)



東京農工大学側 (4名)

- 1 . 望月貞成 (工学部教授)
- 2 . 田谷一善 (農学部教授)
- 3 . 島田 清 (農学部教授)
- 4 . 平沢 正 (農学部教授)

署名は、和やかな雰囲気のうちつつがなく執り行われた。将来、農工大学へ学生を送り出すことになった場合には、優秀で元気の良いだけでなく、アフガニスタンを深く愛する者を選んで下さいと申したところ、皆大いに肯いていた。なお、高等教育省の大臣(代理)がわざわざ署名式に立ち会ったのは異例のことといえよう。

カブール大学の教官からは名刺をもらえないので、名前と顔を覚えるのは容易ではない。そこで、1枚の紙に署名式出席者全員の肩書きと氏名を書いてもらい、そこに記載された順にイスに腰掛けて、我々も含めて記念撮影をした。写真*は、署名時の状況を示す。

4. 視察結果

1) カブール大学の歴史

第2次大戦後、アフガニスタンにおける高等教育の再構築のため、医学部(1932年創立)、法学部(1938年創立)、理学部(1942年創立)、文学部(1944年創立)を統合してカブール大学が1946年に発足した。その後、1951年に神学・イスラム学部、1956年農学部、1957年に経済学部、1959年に薬学部、1962年に教育学部など、順次学部が創設され、現在14の学部を持つとともに、中央図書館・体育館・講堂等を持つ総合大学となり、アフガニスタンの最高学府となった。1975の統計では、在学生8680人、教員825人、中央図書館の蔵書26万冊であった。

科学分野における高等教育の質を維持するため、カブール大学は海外の大学と技術協力や提携関係を結んでいた。医学部・薬学部はフランス・リヨン大学のそれぞれの学部と、法学部はフランス・パリ大学と学術協力・交流を確立していた。理学部と経済学部はそれぞれ、ドイツ・ボン大学、ドイツ・ケルン大学と提携関係にあった。工学部と農学部は米国のいくつかの大学と協力関係にあった。例えば、パデュー大学は60年代から農学部・工学部を支援し、コロンビア大学は教育学部の創設を支援し、これは後にネブラスカ大学に引き継がれた。

アフガニスタン人教員による授業はダリ語またはパシュト語で行われているため、特に科学・技術系分野では教科書の作成は高等教育展開のための必要条件であり、大学の主な使命となっている。1968年までに350種の教科書や指導書が作られ、また大学からは数種の雑誌も刊行されていた。

後に示す略史のとおり、ソ連軍の侵攻とそれに対抗するゲリラ戦、ソ連軍撤退以後の国内各勢力間の争いによる内戦が20余年続いた。カブール市西部は前線であったため破壊と放置が続き、現在もモヘンジョダロの遺跡かと思わせるほどの荒廃状態のままである。カブール大学はこの付近に位置していたため、軍隊の駐屯地として利用された。このため、建物等の大規模な破壊は免れたものの、実験室や講義室にあった材木類、図書館の書籍類が炊飯の燃料や兵士の暖を取るために使われ、大学の設備は著しく損なわれた。また、内戦とともにほとんどの教員は大学を離れ、地方または海外に難を逃れたと聞かすが、この間の大学の運営状況については詳しいことが分かっていない。

また、軍隊の撤退の際には、建物の構造部分を残して換金できるものがすべて略奪され、実験室・講義室はまったくの空っぽとなった。その後、国際支援等により一部机や椅子が補充され、一部教員の帰還とともに、内戦以前の状態からはほど遠い中、実験や実習を行うことが出来ずに講義だけによる授業が行われている。

1973年のクーデター以後の略史を以下に示す。

- 1973.7 ザヒル・シャー国王体制下に甥のダウド将軍によるクーデターが発生し、「アフガニスタン共和国」が成立
- 1978.12 ソ連軍の侵攻 アメリカ・パキスタン・サウジアラビアの支援によるゲリラ戦が展開
- 1989.2 ソ連軍の撤退
- 1992 最後の共産党政権であるナジブラ政権の崩壊 「ムジャヒディン（イスラムの聖戦を戦う戦士）」による連立政権の樹立と対立による内戦
- 1994 オマル師率いる「タリバン」が台頭 「7世紀のアラビア世界の再現」を掲げ、イスラム原理主義に基づく政策を展開
- 1996 首都カブールをタリバンが支配
- 2001.9 米国同時多発テロ発生
- 2001.10 アメリカ軍等によるアフガニスタン攻撃
- 2001.11 北部同盟のカブール制圧 暫定行政機構の発足

2) カブール大学の現状

カブール大学は14学部（法学、宗教学、文学、ジャーナリズム、教育学（Training & Education）、社会学、農学、獣医学、自然科学（Natural Science）、Watershed（?）、薬学、経済学、地理学、芸術：1997 - 1998年組織図による）からなる総合大学で、広大な敷地に建物がゆったりと配置されている。しかし、過去20年余りにわたる戦争による影響は甚大である。教官席は700余席あるが、現時点では充足からはほど遠い状態にある。大学の他のいろいろな部局の機能も大きく低下している。たとえば、大学の中央図書館は開館し、学生も利用しているが、破損設備には未修復のものがあり、蔵書量も戦争前は約26万冊であったが、現在では約7万冊しか残っていない。大学の印刷局は機能を完全に失い、印刷や出版物が全く出せない状況にある。現在修復に力を注いでおり、日本からの援助も当てられている。今年5月には4000名の新入生が入り、女子学生も何年かぶりに入学した。

(1) 農学部

本学部は1956年に設立され、植物学、動物学、農業経済学・普及の3学科で出発した。1976年に学科が増設され、動物学、農業経済学・普及、土壌学・灌漑、農学、園芸学、植物保護学、林学・自然資源学の7学科となった。1992年以前は全学部の教官数は60名以上で、大部分が西欧諸国やアメリカ合衆国で教育を受け、博士や修士の学位を有しており、すべての学科で充実した教育研究活動が行われていた。

1992年以後の戦争で多くの教授がパキスタンやイランなどの隣国に脱出した。現在

機能している学科は、動物学、農業経済学・普及、農学、植物保護学、林学・自然資源学の5学科、10研究室である。教官数は30名で、その半数以上が学士である。博士号を有している教官はごく少数である。学生は3,4年生を合計すると188名である。実験室には引き出しのなかつたり破損した実験台や破損した配管が残っているだけで、機材はほとんど失われ、顕微鏡1台残っていない。したがって、自然科学の教育に不可欠な実験、実習は行えず、現在は理論のみの講義が行われている。残されている実験台のつくりや配管の状態などから推定すると戦争前は設備はかなり充実していたものと思われる。ワークショップにもなにも残っておらず、全く機能していない。学部附属の農場は学内に20ha（?内海教授のメモでは20エーカー）あるが、農業機械の破損により、作物の栽培ができない。現在は樹木がところどころに植え付けられている他は、放置されている状態である。ほかに学外に農家から借りている圃場がある。

視察の際には、農学部長 M.Y.Mohsini 教授、学部長補佐 N.A.Kohestani 教授に加えて動物学科長および同学科教官2名、農業経済学・普及学科教官1名、農学科長及び導学科教官1名、植物保護学科教官2名、林学・自然資源学科教官1名、附属農場主事1名の計12名が同席した。

(2) 工学部

5月20日、協定締結後、東京農工大学の4名の教官は二手に分かれてそれぞれカブール大学の農学部と工学部を視察した。望月は工学部長アブドル・ワヘド・ジア教授(Prof. Abdul Wahid Zia, 専門は電気工学)の案内で工学部に出向いた。工学部は、協定を締結した本部の建物から歩いて12分くらいのところにある。建物は平屋で鬱蒼とした木々に囲まれている。まず、一部修復された建物内の教室を4つほど訪ね講義中の様子を参観した。それぞれ、電気回路、土木の材料強度、宗教（おそらくイスラム教）および物理（相対運動、座標系）の講義中であった。女子学生もいたが、頭を黒いスカーフで覆い男子学生とは離れて座っていた。どの部屋にも、黒板と不ぞろいでお粗末な椅子以外には何も無い。教科書もまた印刷物の配布も無い。まさに、チョークと黒板と学生の持つノートのみである。しかし、講義を聴く学生の態度は極めて熱心である。教室の後ろのほうで眠っている学生などは皆無である。皆、目が輝いている。学びたいという強い意欲を持った者達の集まりであることが大いに感じられる(写真*参照)。講義を中断してもらい、学生達と話をした。ほとんどの学生が英語を理解する。日本に対しては皆憧れを持っているようである。中に、クラスの代表格の元気の良い学生がいて、将来できれば通信させてもらいたいので、e-mailのアドレスを教えてもらえないだろうかと遠慮気味に聞いてきた。名刺を渡したところ大変に喜んでいて、良い意味でのハングリー精神がここにはある。日本への留学希望者を募れば多くのこのような若者が応募するであろうことは間違いない。そのような学生の中からさらに優秀な者をできるだけ多く日本に招き、育て、送り返すことによって、本人にも、

日本にも，そしてアフガニスタンの将来にも良い結果をもたらすであろうことは想像に難くない．



カブール大学工学部における講義風景の例

次に，工学部長に実験室を見学したいと言ったところ，何も無いがそれでもよければ案内することだったので，機械，電機，土木系のいくつか訪ねた．なるほど，どこも残骸以外は全く何も無い．いろいろな装置や器具は破壊と略奪に遭い，金目のものは装置の



カブール大学工学部長室にて，工学部長アブドル・ワヘド・ジア教授と東京農工大学望月教授．



写真* かるうじて残された装置は時代遅れでかつ部品は略奪され
使用に耐えない。かつては高価な装置が数多くあった。

部品さえも抜き取られ持ちさられたそうである。研究はおろか学生用の実験さえ実施できない状況にある。電力事情が悪いため、廊下にほとんど照明が無く暗い。しかし、かなりの部屋が修復されつつあり、スペース的には東京農工大の工学部よりも余裕がありそうである

最後に学部長室に移り、懇談した。工学部長アブドル・ワヘド・ジア教授は、米国ハワイ大学で学部教育を受け、その後ジョージア工科大学ついでワイオミング大学で学位を取得している。専門は電気工学である。ハワイ大学時代に親しい日本人の友人がいたそうで、日本に対して大変親近感を抱いている。懇談の間に若い教官が何人も出入りし挨拶をした。いずれも最近学部を出てすぐに教育スタッフに加わった人達だそうである。彼らは博士はもちろん修士の学位も持たないようである。どうやら、ジア学部長と同じくらいの世代にはアメリカ等、西側で教育を受け人達がかかりいるようであるが、その後長く続いた内戦の影響であろう、ジア教授に続く世代の教官スタッフは手薄のようである。カブール大学からは、学生のみならず、学位を持たない若手の教官を日本で教育し学位を取らせるようにしてほしいとの要望も出されたが、それはこのような背景に基づくものと理解される。さらに、日本から短期間でも講義に来てくれる人が居たら大変にありがたいと言っていた。写真*は、学部長室において、工学部長アブドル・ワヘド・ジア教授と望月とを撮影したものである。

(3) 獣医学部

アフガニスタンにおける獣医学教育は5年制である。アフガニスタンでは、カブール大学とNengerhar大学(Jalabad Provinceにある)の2大学で獣医学教育を行っているが、Nengerhar大学の獣医学部は、カブール大学に比べてかなり規模が小さい。カブール大学の獣医学部は、1974年にUNDPからの援助とアフガニスタン政府の予算で設立された。1982年～1983年には、獣医学部に75名の教官があり、5つのDepartment(Clinic, Preclinic, Paraclinic, Food control and Sanitation, Animal Husbandry)と高度に整備された21の研究室で教育が行われていた。全ての教官は、博士号あるいは修士号は有していた。教室にはオーディオシステムが完備され、学生用と教官用の2つの図書館が整備されていた。また、Darul Aman地区に高度に完備された実験牧場(ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダ、口バの牧場)と臨床実習用施設が設置されていた。21の研究室には、1名ずつのテクニシャンが配置されており、カブール大学の卒業生も含まれていた。

このような高度に整備されたカブール大学獣医学部も度重なる内戦により、全ての実験機材が略奪され、1台の顕微鏡もなく、理論のみの教育となっている。75名いた教官も内戦のため国外へ脱出したり、死亡して現在では14名に減少したが、暫定政権が設立後は、国外へ脱出した元教官の帰還が始まっている。現在の学生数は、1年生61名、2～5年生が150名である。学部長(Noar Ahuad Ahuad Ph.D.)は、Animal Husbandry(畜産学)の専門であり、修士号を米国ネブラスカ大学、博士号をオーストラリアのニューサウスウェールズ大学で修得している。農学部長と同級生である。

視察の際には、Kh.M.AFZALI(Ph.D.)(解剖学助教授)、Gul Mohammad Tanin(Ph.D.)(動物生産学主任教授)、Noar Mohammad Ayubi(Ph.D.)(副臨床講座助教授、主任)の4名の教官が出席された。

5. カブール大学からの要望

今回の視察により、農学部、工学部、獣医学部の教官と直接面談し、各学部の現状を調査した。その結果、次のような要望があった。

- (1) 教育のための実験実習器材
- (2) 教官が講義をするための英語の専門書
- (3) 修士号および博士号の修得を目的とした学生および若手教官の日本留学
- (4) 日本からの教官の派遣 (5) 教官の短期間研修(2～3ヶ月)
- (6) 教室の整備(椅子、机、黒板、チョーク、OHP、テレビ、スライド等)
- (7) 教科書等を印刷するための印刷機

以上のように、農学部、工学部および獣医学部のいずれにおいてもほぼ同様の要望があった。上記6項目にまとめた要望のうち(3)、(4)および(5)は、人的支援に関する内容であり、(1)(2)(6)と(7)は、物的支援に関する内容である。

これまで、パデュー大学(米国)とボン大学(ドイツ)から視察団が来ており、東京農

工大学が3番目の視察団である。これまでの視察団は、種々の支援に関して約束はしたが、現時点まで何も改善されていない。パデュー大学には、要求内容をまとめて提出したが何も反応はない。9月に再びパデュー大学から視察団が来ることになっている。

6. 今後の支援策

今回カブール大学の教官から要求のあった内容を列挙したが、現状の施設の視察を行い、直接学生の教育に携わる教官との話し合いで得られた感触から「カブール大学からの要望」にできるかぎり速やかに対応する必要がある。日本からの高等教育の支援の中で、人的支援については、具体的に留学生や若手教官の修士課程や博士課程への受け入れと教官の短期（2～3ヶ月）研修の受け入れおよび農工大学からの教官の派遣の3つ位に絞られるが、いずれも可能なかぎり早期の実施が望まれる。岸田文雄文部科学副大臣は、カブール大学を訪問し、副学長、農学部長および工学部長と会談した際に、日本として2003年から国費留学生10名の受け入れが可能であると表明した。しかし、カブール大学の現状を考えると本年度からでも受け入れを検討する必要があると考えられる。このような人的支援については、我が国の大学における受け入れ体制が整っていれば可能な内容である。

物的支援については、さらに実験実習器材や英語の専門書と教室の椅子や机、コンピュータなどの器材に分けられる。この点は、緊急に政府レベルで対応策を考える必要がある。

自然科学系の研究内容は、毎年発行される科学ジャーナルに掲載される。このような雑誌は、日本では学術登録団体が発行するものであり、各雑誌共、発展途上国の大学や研究機関へは無償で配布するシステムが用意されていることが多い。従って我が国で発行され



アフガニスタン高等教育省にて、左より、駒野駐アフガニスタン大使、岸田文部科学副大臣、アーリム高等教育大臣代理

ている英文誌については、カブール大学への無償配布の可能性もあろうと考えられる。

7. 高等教育副大臣との会見

5月19日、大学間協定を結ぶ前日、岸田文部科学副大臣とともに望月がアフガニスタン高等教育省を訪問した。(同じ時間帯に農学部の田谷一善、島田清および平沢正教授3名は農業省に出向き農業大臣と会見した。)ファエズ高等教育大臣が外国出張中であったため、高等教育省のサイド・ナイーム・アーリム大臣代理が会見した。岸田副大臣より日本からのアフガニスタン支援策について説明がなされた後、東京農工大学とカブール大学との大学間協定について話し合われた。望月より、明日その協定を結びたいのだが、カブール大学の学長が出張中で不在なのは残念であると述べたところ、大臣代理より、明日自らカブール大学に出向き、協定書の署名式に証人として立ち会うとの申し出があった。大臣(代理)立会いの下で大学間協定の締結がなされるのは極めて特別なことといえよう。会見は40分ほどの短いものであった。その様子を写真*に示す。

8. 農業大臣との会見

5月19日アンワリ農業大臣と会見した。会見には、東京農工大学から3名の農学部教授(田谷一善、島田清、平沢正)が出席した。ダリ語から英語への通訳は、農業副大臣が行った。

農業大臣は、日本からの視察に対し敬意を示した後、次のような要望があった。現在、アフガニスタンでは、食肉センターが破壊され食肉の検査等の業務は、ほとんど行われていないために、安全な畜産物の供給が困難である。家畜の増産と安全な食品確保のために家畜の疾病の防除などの獣医学分野の協力が必須である。日本がカブール大学での教育を通して支援してくれることは大変有難く感謝している。一日でも早い具体的支援を期待している。

9. 視察結果の考察

今回のカブール大学の視察の目的は、農学部・工学部・獣医学部の教官と直接面談し、まず大学教育の現状を把握し、教官の要求事項を整理し、我が国としてどのような支援策が可能であるかをまとめることであった。

2日間にわたって調査した結果から第一に認識すべき事項としては、カブール大学の現状を考えるといわゆる発展途上国の大学が大学教育をさらに充実する形態とは全く異なることが挙げられる。すなわち、カブール大学は、創立70年を迎えるアフガニスタンの最高学府であり、14学部を擁し、各学部棟のほかに、図書館、体育館、講堂等が整備されていた近代的な大学であったことである。内戦以前には、かなり充実した大学として高度な学部および大学院教育を行っていたが、長年の内戦中に大学が軍の駐屯地にされるなどの被害に会い、大学の施設がことごとく破壊され、ほとんどの実験器材が略奪されたもので

ある。現在の学生数は、3,200人、教官400人、事務官700人であり、5月には新たに4,000人の新入生が合格した。アフガニスタンの大学入試は、全国统一試験であり、約20,000人が受験し、その内1,400人が不合格であったが、その他の18,600人は成績により全国の高等教育機関に振り分けられたとのことである。

以上のような背景からカブール大学の教官には、何とかしてまずは内戦で破壊される以前の教育水準に復興したいとの強い意志が感じられた。

今回、カブール大学から提出された要望を分けると、(1)学生および教官を日本に留学させること、および日本からの教官の派遣等の人的支援と(2)実験実習器材や大学の施設の改善などの物的支援に大別することができる。カブール大学からの要望にもまとめたごとく、現在勉学を続けている学生たちに少しでも高度の教育環境を授けるべく教育のための実験実習器材やこれまでの15年間以上にわたる空白を挽回し、学生に高度な知識を講義すべく、英語の専門書の要求などについては、大学で教育を担当する教官としてカブール大学の教官の心情は痛いほど理解できる。また、勉学意欲に燃える学生たちに日進月歩の自然科学の知識を教授すべく、教官が日本で学位を取得したり、あるいは短期間の研修を行い帰国してカブール大学の学生に新しい知識を授けたいとの要望もよく理解できるところである。さらに、カブール大学さらにはアフガニスタンの高等教育の将来を担う若い学生を日本へ留学させ、修士課程および博士課程において最新の教育を受けさせ博士としてカブール大学へ帰還させ将来は、重要な大学教官として育てたいとの要求も当然のことである。

第一の人的支援に関しては、面談した教官から、学生については愛国心の強い優秀な学生を、また、教官についてはすでに英語での教育を受けた研究・教育者を送りたいので、できるだけ早く対応してほしい旨の強い要望であった。

以上のように、今後の日本からのカブール大学への支援策について、考えられる内容を記述したが、できるだけ速やかな対応が必要であろうと考えられる。現在カブール市内で日本が援助して始めているバック・ツー・スクール・キャンペーンのように世界の人々の目に見える支援、また少しでも短期の効果を考えたクイックインパクト・プロジェクトの実行が重要であると考えられる。留学生や教官の受け入れについても可能な限り本年度からのスタートが必要であり、また速やかな対応は他国に対しても日本の教育支援貢献に対するインパクトが極めて高いものと考えられる。

今回の視察では、農学部・工学部・獣医学部の3学部のみ調査を行ったが、残り11学部についても早急に同様な調査を行い早期の改善対策が必要である。

あとがき

アフガニスタンに限らないが、海外から学生を迎え入れ教育を実施するには、講義に英語を用いることが強く望まれる。日本語・日本文学あるいは日本文化など日本語を学ぶことが必須である場合を除き、講義は英語でなされなければ将来国際的な留学生受け入れ

競争において日本は非常に不利となることは明らかである。現在は、日本の経済的な強さが留学生を惹きつける大きな魅力になっているが、これは必ずしも本質的ではないし、将来とも保証されるものでもない。日本語は、世界の中でも極めて難しい言語の一つであり、日本でしか使われない。いくら教育の内容が良くても、研究のレベルが高くて、同じような教育・研究が英語でなされているところと日本語でなされているところがあった場合、どちらでも自由に選べるとすると、留学生は迷わず英語の方を選ぶであろう。一方、受け入れる留学生に対してだけでなく、日本の大学の卒業生が国際性を具備して、将来世界的な場で活躍できるようになるためにも、英語でのコミュニケーション能力を身に付けておくは欠くことができないものとなる。今後、大学として国際化を目指すのであれば、日本人学生、留学生双方に対して英語による授業を実施することは必須のものとならざるを得ないであろう。このことは、今回のアフガニスタン訪問時に、文部科学副大臣や審議官などとの雑談の折にも出てきた話で皆この意見には強く賛成する。

東京農工大学では、専門教育の講義を英語でやろうと思えばできるはずである。一刻も早く少しでもその方向に本学の体制を持ってゆく必要があることを、アフガニスタンのカブール大学を訪ねた折に改めて強く感じた次第である。

今回の視察は、アフガニスタンの支援という世界的な動きのなかで日本が約束した支援（2004年までに約500億円）を実現するための具体的方策を立てるための実地調査を目的として実施された。支援の内でも、文部科学省（したがって本学）ができることは教育関連ということになる。しかし、同じ教育関連でも機器等の支援については、はおそらくJICAなどを通じて行われることになると思われる。その際に、まずどのような教育機器が必要かについては我々大学人に相談があろう。JICAもアフガニスタン支援のために動いており、現在調査ミッションを現地に派遣している（6月帰国予定）。その調査結果は、我々にも知らされ、意見を求められる可能性が高い。

さらに、東京農工大の姉妹校であるPurdueとの協力をどのような形で進めるべきかも今後の大きな検討課題の一つになろう。

今回は、副大臣一行とほとんど行動を共にしたこともあって、旅行そのものについても得難い経験をした。閣僚級の旅行に際しては、行く先々で現地の大使館を通じて全てが事前にアレンジされているため効率が良く快適であるが、一方において自由度はほとんど無い。また今回は17日から22日までの6日間のうち、ホテルなどに宿泊したのはパキスタンのイスラマバード1泊とカブール2泊の計3泊だけで、他は機中あるいは空港の待合室（といってもVIPルームだったが）での時間待ちという極めてハードなスケジュールで、大変であった。

最後に、アフガニスタンで聞いた悲しいジョークを一つ。「オサマ・ビン・ラディンには生きていて欲しい。もし死んだとなると、米国をはじめ世界のアフガニスタンへの関心は急激にさめてしまい、我々はまた簡単に忘れ去られてしまうであろうから。」